

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：23901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21650140

研究課題名（和文） 失語症者への個人支援を公的制度化するための基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental Research for Making Public System of Personal Support to Aphasic people

研究代表者

吉川 雅博（YOSHIKAWA MASAHIRO）

愛知県立大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：20315865

研究成果の概要（和文）：失語症者の個人支援を福祉サービスとして行うためには、新たな制度を作る必要はなく、現状のコミュニケーション支援事業の運用により可能である。しかし、失語症者自身のエンパワメント(力をつける)が必要不可欠であり、個人支援を担う人材（ヘルパーや会話パートナー）の育成も必要である。今回新たに作成した評価表での評価結果を会話パートナーに示しながら、自身の会話特徴に対する気づきを促し、再評価結果で改善を確認する方法が効果的であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The present Communication Support System is useful for personal support to Aphasic people. But empowerment of Aphasic people themselves is most important. We don't have official personal care worker to support aphasic people. So Training official personal care worker of Aphasic people is important, too. We made a new scale of conversation to improve technique of Conversation Partner for aphasic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	0	1,600,000
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	240,000	3,440,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：人間医工学・リハビリテーション科学、福祉工学

キーワード：言語聴覚療法学、失語症、社会参加、個人支援、エンパワメント、会話パートナー、会話評価尺度

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 失語症者に対する支援は、主に医療機関の言語聴覚士によって、発症早期から行われているが、医療保険制度の改定、介護保険制度の導入により、医療機関にて、集中的に言語リハビリを継続することが困難な状況が生じている。本邦での医療・介護制度の現

況を踏まえて、失語症者に対する適切な支援のあり方を再検討する必要があると考えられた。

(2) 失語症者への先の調査により、失語症会話パートナー（以下 CPA）に対する個人支援への要望が高いことが判明した。実際に個人支援をどのような方法で実施したらよ

いかを検討する必要があると考えられた。

(3)「失語症会話パートナー養成カリキュラムのガイドラインに関する試案」(吉畑ら, 2003)によれば、CPA 養成に際し、基本的に温かい目で見守ることが必要であるが、フィードバックする際は、具体的に、反応のどこが良好で、どこが望ましくないかを具体的に指摘することが大切であるとのことである。今後、CPA による失語症個人支援など支援内容の拡充を行う上で、そのような CPA のスキルアップのための支援が必要と考えられる。また、吉畑らは、CPA 養成後には、CPA のコミュニケーション方法について評価することが大切であり、その評価法の開発が今後の課題としている。しかし、会話自体の評価尺度は、英語圏では SPPARC (Lock ら, 2001) や、会話観察尺度 MSC, MPC (Kagan ら, 2004) が存在するものの、本邦には現在のところ存在しない。

## 2. 研究の目的

(1) CPA は、2004 年以降、失語症友の会の活動支援を行ってきたが、CPA に対する失語症者の認知度、利用状況の現状を把握し、さらに、CPA 活動の場の拡充を目指して、失語症者のニーズを調査する。

(2) CPA による失語症者個人支援の追跡調査を実施し、その効果や問題点を検討する。

(3) 言語聴覚士 (以下 ST) と CPA の失語症者との会話時の違いを、独自に作成した会話評価表を用いて把握し比較検討する。さらに、独自に作成した会話評価表の有効性と改善点も検討する。

## 3. 研究の方法

(1) 失語症友の会、デイサービス、病院に通所中の在宅失語症者 188 名に対し、調査を依頼し、郵送にて回収した。調査内容は、①年齢、性別、発症からの経過期間、失語症と麻痺の程度、原因疾患など ②CPA の認知度、利用状況、CPA に対するニーズであった。

(2) 支援希望の失語症者と支援した CPA の 9 組に対し、支援計画立案にはコーディネーターとして立会い、支援の実施状況は両者より報告書を受け、支援後には、支援活動の達成度、満足度、感想を質問紙(郵送法)にて調査した。

(3) 対象は、中～重度の失語症状を残存した慢性期失語症者 6 名(男性 5 名・女性 1 名、平均年齢 69.0±7.4 歳)とその対話者として、キャリア 15 年以上の ST、活動歴 1 年未満の CPA 各 6 名であった。

手順は、失語症者 6 名が、各々初対面の CPA・ST と各 1 回ずつ 15～20 分の会話をした。会話内容は、各失語症者が持参した興味のある

内容の新聞記事を話題とし、VTR に収録した。会話終了後、失語症者、ST、CPA にそれぞれ会話の感想を調査した。

SPPARC (Lock, 2001) と MSC, MPC (Kagan ら, 2004) を参考に、会話態度 7 項目、会話技術 15 項目(理解面 4 項目、表出面 6 項目、その他 5 項目)からなる評価表を独自に作成した。

全会話の中盤 5 分間を分析対象とし、SPPARC に従ってトランスクリプトを作成した。事前に基準を学習した ST、ST 養成校学生各 1 名が、各々録画とトランスクリプトを見て各評価項目に該当すれば Yes (1 点)、該当しなければ No (0 点)にチェックし、相当するターン番号を記載した。

## 4. 研究成果

(1) ほとんどの会員が CPA の存在を知り、その多くが友の会活動の中で支援を受け、今後も CPA に友の会活動の支援を継続してほしいと希望していた。このことより、これまでの CPA による失語症友の会活動の支援が一定の成果をあげていることがうかがえた。一方、友の会非会員では CPA の存在すら知らない失語症者が過半数を占めた。今後の支援希望も利用経験者では多いが、未経験者では少なかった。その理由は、「家族がいるから」、「一人で行動できるから」に次いで「会話パートナーの役割がわからない」との回答が認められた。CPA は、家族の代わりではなく、新たなニーズを開拓する可能性を持ち、社会との架け橋としての役割を担い得るという実証に基づく PR が必要と思われる。

さらに、CPA に対する支援希望は、利用経験者では特に「友の会の活動支援」が多かったが、個人的活動の支援希望も内容が多岐に渡っていた。期待する資質としては失語症に関する知識や技術だけでなく人となりに関する期待も利用経験者で高かった。失語症者は CPA の支援を経験することができれば、その有用性を知り、個人的活動の支援をも希望しうる。CPA には失語症者個々の社会参加を推進する役割が期待される。

現状のコミュニケーション支援事業は、失語症を本事業の対象と規定しているため、失語症者の個人支援に関する新たな公的制度を作る必要はなく、現状の本事業の運用により可能である。

ボランティアである CPA では、個人の生活に深くかかわるような支援内容に対しては支援の限界もあり、個人支援の専門職であるヘルパーが適任だと考える。ただし、現状のヘルパーの養成カリキュラムには失語症をはじめコミュニケーション障害の理解に関する内容が含まれていないため、別途コミュニケーション障害の理解に関する研修を行

う必要がある。コミュニケーション障害に関する研修を修了したヘルパーが、失語症者の個人支援を担う人材となるべきである。

(2) 支援内容は、手紙の代筆・校正、講演会・受診・絵画展の付き添い、役員業務支援、光回線取付、介護保険申請の付き添いと多岐に渡っていた。

活動の達成度、満足度は全ての参加者が高く、ほとんどが支援の継続を希望した。Eさんは、家族の代わりにCPAに受診の付添いを依頼したが、CPA付添支援後、一人で受診可能となった。独居のHさん、Iさんには、特に、CPA側が支援の必要性を感じ、支援継続を希望した。また、失語症者数名からCPAと会話ができてうれしかったと感想が寄せられた。さらに、G氏のように、失語症者が家族やSTでなく、自主的な活動を支援する目的であるCPAの支援を受けて活動することにより、自立への自信が高まり、さらなる自主的活動、社会参加に発展する可能性を持つことが予想された。すなわち、CPAによる社会参加の支援は、そのことの達成だけにとどまらず、価値観の変容に関わるものであり、自力での活動範囲を広め、さらなる社会参加に発展することが予想される。

また、今回の失語症者の感想から、CPAに対し、ニーズを満たすこと以外に、コミュニケーション相手としての役割を期待していることが判明した。CPAは訓練者ではなく、対等なコミュニケーション相手として関わることが可能である。このような活動自体、失語症者にとってはコミュニケーションスキルアップの可能性にも繋がることを期待される。従来の失語症検査でははかりえない、これらの側面での失語症者の変化を知るための評価が、今後必要になるものと思われる。

今回の個人支援に関する最大の問題点として、具体的な個人支援のニーズが集まりにくいことがあげられる。この問題点への対応策を検討するためには、環境への働きかけという視点に加え、失語症者のエンパワメントを支援する視点が必要となる。また、友の会活動を複数のCPAで支援する場合と異なり、失語症者の個人支援は、個人の責任が重く、CPAのコミュニケーション技術や支援経験が問われることになるため、何らかの研修制度が必要であろう。2010年、筆者らが視察したCanadaの失語症センターやのシステムや、SPPARC (Look, S, 2001)での会話指導が参考になると考えられた。

(3) CPAは「傾聴態度」「理解や共感の伝達」等は、ST同様高得点だったが、「非言語的手段の活用」「トラブル修正に協力的」「他の伝達手段活用の促し」は、STより有意に低かった。CPAが不十分であった上記の項目は、失語症者の喚語困難などのトラブル対策として有効な技術と考えられる。今後、CPAの

養成や研修で重点的に指導する必要がある。今回実施した評価をCPAに示しながら、自身の会話特徴に対する気づきを促し、再度同様の評価で改善を確認するという方法は、大変実践的で効果的であるものと予想される。

今回、失語症者との会話を捉えるための評価表を独自に作成し、それを用いて、失語症者との会話状況を客観的にとらえることが可能であった。筆者以外の評価者2名が評価したところ、12項目で80%以上の一致率となり、全体としてもある程度の信頼度を確保することができたが、項目による差が認められた。特に「緊張緩和」「心理的サポート」などの一致率は50%に満たなかった。それらの項目では、さらに、評価内容を詳細に規定する必要があり、評価表改善の必要性が認められた。

会話の録画と評価表を用いて、実際に、失語症者とCPAに会話状況のフィードバックを行い、会話時の問題点への気づきを促すという会話指導あるいは会話支援を実践し、その試みが、実際に効果的であるかどうかを判定することが今後の課題である。この方法の有効性が示されるならば、CPAのみならず、失語症者の家族や、ST養成校での学生の指導にも生かされるものと期待される。さらに、失語症者の側の会話への参加度、コミュニケーションストラテジーの使用状況やその有効性などについても検討する必要がある。CPAによってもたらされる会話の機会の増加が、実際に失語症者のコミュニケーション能力自体を改善させることが立証されれば、CPAによる失語症者サポート活動の意義がさらに高まるものと推察される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 吉川雅博、失語症者のエンパワメントに向けた提案と課題、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、60号、2012年、pp. 61-69.
- ② 鈴木朋子、会話パートナーによる失語症者支援の現状と今後の展望、愛知淑徳大学健康科学研究、査読有、2号、2012年、pp. 27-38.
- ③ 吉川雅博、失語症者の社会参加促進に向けた支援、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、59号、2011年、pp. 27-33.
- ④ 吉川雅博、在宅失語症者への公的派遣サービス創設に向けて、愛知県立大学教育福祉学部論集、査読無、58号、2010年、pp. 67-81.

〔学会発表〕(計6件)

- ① 鈴木朋子、失語症者との会話の検討：対話者の違いによる分析、日本コミュニケーション障害学会、2012年5月12日、県立広島大学。
- ② 吉川雅博、失語症者が利用する福祉施設へのコミュニケーション支援、日本コミュニケーション障害学会、2011年5月28日、JA長野県ビル。
- ③ 鈴木朋子、会話パートナーによる失語症者個人支援の効果と問題点について、日本コミュニケーション障害学会、2011年5月28日、JA長野県ビル。
- ④ 吉川雅博、公的サービスを想定した失語症会話パートナー派遣対象のガイドラン、日本コミュニケーション障害学会、2010年5月30日、姫路市民会館。
- ⑤ 鈴木朋子、「会話パートナーに対する失語症者の認識とニーズについて」、日本コミュニケーション障害学会、2010年5月30日、姫路市民会館
- ⑥ 吉田 敬、「失語症者の会話中に生ずるトラブルの修復過程—会話分析を用いて—」日本コミュニケーション障害学会、2010年5月30日、姫路市民会館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉川 雅博 (YOSHIKAWA MASAHIRO)  
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授  
研究者番号：20315865

### (2) 研究分担者

鈴木 朋子 (SUZUKI TOMOKO)  
愛知淑徳大学・健康医療科学部・准教授  
研究者番号：30440762  
吉田 敬 (YOSHIDA TAKASHI)  
愛知淑徳大学・健康医療科学部・准教授  
研究者番号：90387837